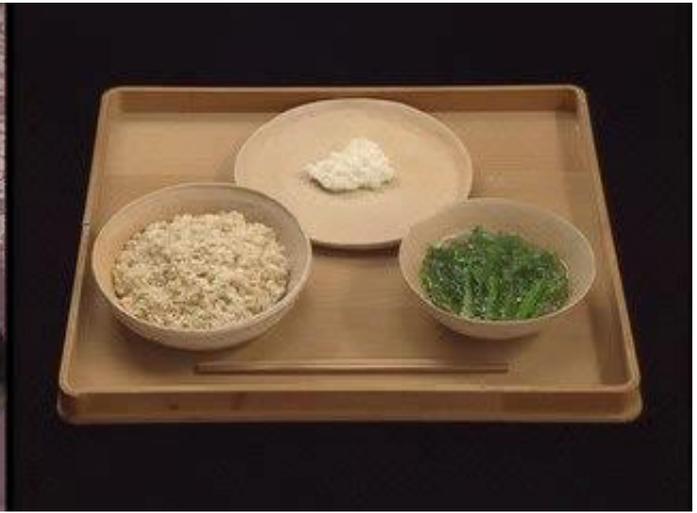


【貴族の食事】

【庶民の食事】



【貴族の生活】

このころ、公地公民（こうちこうみん）のため、土地と民衆は国（天皇）のものであった。貴族は土地や民衆を直接所有していない。そのため、貴族の生活は、農民からの税金（租・庸・調）でまかなわれていた。

貴族たちは役人として、国（天皇）のために働き、国（天皇）から給料が与えられていた。貴族には、位や役職に応じて、農民がおさめる租・庸・調（そ・よう・ちょう）の一部が与えられた。太政大臣には位封（いふ：給料のこと）として300戸の農民がおさめる庸・調（よう・ちょう）と租の半分が与えられた。また、季節ごとに絹（きぬ）、綿（わた）なども与えられた。正一位太政大臣になると年収（1年間の給料）になおして6億円、正五位ならば3000万円、正六位だと700万円になった。

貴族は税金をおさめなくてもよかったので、農民と貴族の生活の差はくらべようがなかった。このころの貴族の生活は、農民によって支えられていたのである。

【庶民の生活】

ひんきゅうもんどうか やまのうえのおくら 貧窮問答歌（山上憶良より）

風まじりに雨が降り、その雨にまじって雪も降る、そんな夜はどうしようもなく寒いから、塩を少しずつなめて、せきをしては鼻水をすすり上げる。寒いから麻でつくった夜具をひっかぶり、麻布の半袖をありったけ重ね着をしても、それでも寒い。こんな寒い夜には、私よりもっと貧しい人の親は飢えてごえ、その妻子は力のない声で泣くことになろうが、こういう時には、どうやってお前は生計を立てていくのか。

太陽や月は明るく照り輝いて恩恵を与えて下さるとはいうが、私のためには照ってはくださらないのだろうか。他の人も皆そうなのだろうか、それとも私だけなのだろうか。たまたま人間として生まれ、人並みに働いているのに、綿も入っていない麻の袖なしの、しかも海松のように破れて垂れ下がり、ぼろぼろになったものばかりを肩にかけて、低くつぶれかけた家、曲がって傾いた家の中には、地べたにじかにわらをして、父母は枕の方に、妻子は足の方に、自分を囲むようにして、悲しんだりうめいたりしており、かまどには火の気もなく、米などを蒸すための土器にはクモの巣がはって、飯をたくことも忘れたふうで、かぼそい力のない声でせがんでいるのに、ムチを持った里長の呼ぶ声が寝室にまで聞こえてくる。世間を生きてゆくということはこれほどどうしようもないものなのだろうか。

この世の中をつらく身もやせるようにたえがたく思うけれども、飛んで行ってしまうこともできない。鳥ではないのだから…。